市芦救援会通信

市芦救援会通信 〒659 芦屋市剣谷9 市芦分会気付け 0797(32)1131
通巻36号 89／12 (1部100円) 市芦救援会 発行人 玉本 格

日程 第23回審理 1月10日(水) AM10～12 小林証人生尋問
第24回審理 2月3日(土) AM10～12 〃

前田元校長の虚偽を暴き 市芦つぶしの手口を証言させたこの一年

一九八六年秋以降の反弾圧闘争も四度目の年の瀬を迎えようとしています。この間、二二回の審理の中で、「行政改革」「教育改革」の本質が、「組合つぶし」と「生徒切り捨て」にあることを明らかにしてきました。

一年近く前田市芦元校長を追及する中で、組合支部事務所への張り込みスパイ行為、組合役員処分の証拠書類（公文書）偽造・改ざん、学校教育法に違反してまで助教諭・実習助手（共に非組合員）を部長にした任命主任制の導入、組合活動家の仕事はずしと強制配転等々と、多くの不当労働行為を明らかにしてきました。

また、「生徒一人一人の進路を大切に」とした「教育改革」は、教員の相互協力体制を一切崩しての組合対策的管理体制下の中で、従前の生徒の進路保障運動をつぶしました。

市教委が目指した「大学進学率向上」は、むしろ「教育改革」以前から比べて激減していく結果になり、生徒指導においても中途退学者を増加させる結果となっています。

市教委が今年あらたにうち出した「市芦国際高校化構想」や県教委の「総合選抜制見直し・学区再編成」の動きは、ほんの一部のエリート育成で、多くの生徒をさらに切りすてていくことになります。

この一年間、多くの市民・労働者・争議団の方々のご支援をいただき、審理傍聴、教育井戸端会議等での交流も深まっています。ここにお礼を申し上げますとともに、来年も変わらぬご支援、ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

も／く／じ

前田元校長の虚偽を暴き、市芦つぶしの手口を証言させたこの１年……市芦救援会事務局 …… 1
生徒切り捨ての学区再編・定通統廃合 …… 市芦救援会事務局 …… 2
学区再編で芦屋の子供はさらに切り捨てられる …… 救援会事務局 …… 3
子供を見る目が崩れてゆく …… 精道中学分会 加納健次 …… 5
「教育改革」の失敗と学区再編の幻想 …… 市芦分会 大角進一 …… 8
障害児の能力別再編も符号する …… 麦の家 永岡隆仁 …… 9
近況 非論理的世界―強配に腹が立つ …… 石橋幹夫 …… 10
芦屋の糞尿譚 …… 森村啓一 …… 11
試験期間中の自宅研修は時期尚早 休憩室は印刷室を …… 市芦分会 …… 12
第５回芦屋教育井戸端会議の御案内 …… 14

第四回芦屋教育井戸端会議報告

県教委「高校教育問題調査研究会中間報告」批判
生徒切り捨ての学区再編・定通統廃合

市芦救援会事務局

十二月二日、第四回芦屋教育井戸端会議が開かれた。学区変更問題と定時制・通信制統廃合・単位制高校問題をテーマとして話を持ち寄ろうということであった。

前者は、芦屋の親の一部で「悲願」とまで強調されている神戸第一学区と芦屋学区の合区にかかわることとして大きな関心を呼んでいる。後者は、地域で唯一の定時制高校の存廃にかかわることであるにもかかわらず、小さな関心も生んでいない。しかし、この二つのこと、実はひとつながりのことではないのかということでテーマが設定された。

そもそもは昨年四月に県教委が「高校問題調査研究会」なるものを発足させたことである。当面する高校教育の諸問題について調査研究をするという。この種の諮問機関のいかがわしさは、芦屋市教委のデッチ上げた学教審でも証明済みである。その中間報告が今年八月に出された。その要点は①入学者選抜制度、②通学区域、③職業教育のあり方、④定時制通信制教育の在り方の四点にある。いずれも現在の高校教育のかかえる問題の解決の指針とは程遠く、むしろ受験競争の一層の激化と「教育荒廃」をすすめるものとの批判を浴びている。中間報告の問題点を論じながら、会はすすめられた。

辻さんからは、定時制高校の現場にあって今の現場の実態、定通統廃合が与える生徒への影響、構想されている単位制高校の問題点が話された。（次号掲載）具体的な事実を丹念に取り出しながら話される中味は問題の深刻さをずしりと伝えるものであり、辻さんの息づかいの聞えるものであった。

現在の定時制生徒の生活実態は基本的に今も昔も変らぬものであり、定時制高校を取り巻く状況のきびしさは少しも変らぬものであることを、クラスの生徒の毎日の生活と学習の姿で、あるいは進路のことで訴えられた。まして、現場での管理体制の進行は、学校の内と外の両方で生徒を追いこむことになっていることを指摘された。それに加えての定通統廃合の攻撃である。それは定時制生徒の就学の機会を奪うことであることを魔耶兵庫移転反対運動の中での生徒の声からも強調された。これは芦屋地域の唯一の定時制高校である武庫高校の存廃にかかわる問題でもあり、単位制高校創設の問題とあわせて対応の迫られる課題である。

学区制問題については、直接市教委が前面に出るのではなく、ＰＴＡを通して「長年神戸第一学区の高校へ子どもを進学させたいと思っていた親の悲願の実現」というキャンペーンがはられている。そこでは学区変更が子どもの教育にどんな影響を及ぼすのか、といった議論は一切不問に付されている。そうしたすすめ方について、小中学生を持つ親から不安や不信が出される一方、そのキャンペーンがある程度浸透していく状況への切りこみが求められた。深沢さんや加納さんの話は、学区制問題の本質にふれる問題の提出であり、議論の誘い水となるものであった。（後掲）

大角さんからは、市芦教育改革は中間報告を貫ぬく流れに即したもので、改革三年目にして、いかに無惨な破綻を示しているかが補足された。障害児を持つ親の立場から永岡さんは、障害児教育再編のやり方を話され、その基本的考え方が同じものであることを示された。同日、芦教組の行なった「希望する子に高校教育を」と題する教育シンポジウムとあわせて論議を深めていくこととなった。

学区再編で芦屋の子供は
さらに切り捨てられる

救援会事務局

高校に行けない四千人の生徒

かって芦屋学区は、兵庫県平均九五％をはるかに上回る九八～九九％という高い高校進学率を維持してきた。それは、進学保障制度に代表される、小中高一貫した教育運動と進路保障運動に、芦屋の教育が支えられてきたからである。「松本教育改革」以後、芦屋の高校進学率は、市芦の定員内大量不合格などにより一挙に九五％に落ち込んだ。一九八九年五月の調査では、市芦の定員内不合格がなかったとはいえ、九六・七％とかっての進学率を相当下回ったままである。芦屋学区との統合で問題となる神戸第一学区のそれは九五・八％で、芦屋学区よりもさらに低い。

一方兵庫県教委は「進学率は九五％を維持する」との方針を変えておらず、残り五％の高校不就学者の問題は眼中にないのが現状である。さらに、生徒や親の関心の高い全日制普通科の公立高校の開門率をみてみると、芦屋学区六七・三％、神戸第一学区四六・八％と、その開きは大きい。従って、学区の統合によって、この差は平均化され、神戸から大量に生徒が流れ込んでくることになる。

今年、芦屋で三〇名、神戸で二三五名の高校不就学者を出した。全県でその数は四三五六人におよぶ、せめて高校だけはという生徒や親の願いは入れられず、毎年四千人を越える生徒が高校入学を拒否されている。

これらの高校へ入学できない多数の生徒の教育権の保障には目もくれず、兵庫県教委高校教育問題調査研究会は、「学区の再編によるごく少数のできる子の高校選択の自由の保障」と「定時制、通信制高校の統合と単位制高校化」を推進し、そのことによってさらに生徒切り捨てを行おうとしている。

高校全入思想の破壊

芦屋学区では、解放運動・教組運動の存在によって限りなく高校全入に近づき、さらに障害児の高校進学もその課題に乗せ、本当の意味での高校全入を実現しようとしていた。その矢先、他学区への運動の波及を恐れた県教委と芦屋市教委は、市芦弾圧をはじめとして、芦屋の教育運動の弾圧と破壊に着手した。

芦屋では、すべての生徒に高校進学を保障することを目標とし、人の生き方ということも課題に据えたところで、幅広い価値観の中で進路保障運動を取り組んできた。

しかし、そうした教育運動は今のところ必ずしも広範に取り組まれているとはいえず、「一流大学への進学」が最高の価値となった偏狭な価値基準の中で、生徒も親も教師も身動きしているのが現状である。

神戸第一学区においてもそのことは例外ではなく、こうした中ではいきおい、成績による輪切り指導が進路指導の中心となってしまう。神戸では、学校全体で誤差（不合格者）二～三名という正確さで、本人の希望とは無関係に受験する高校が割り当てられていく。高校の入学定員の不足と「一流校」への希望者の集中、そして学校の「責任感」がこうした「スライス指導」とも呼ばれる徹底した輪切り指導を生み出している。その中で、ごく一部の成績の良い生徒をのぞく大半の生徒が不本意入学を強いられている。

神戸第一学区と芦屋学区の統合は、芦屋の教育運動を破壊し、こうした徹底した選別輪切り体制の下に生徒と教師を組み込んで行くことを意味している。

芦屋市教委は、議会では「みなさまの意見をお聞きして判断したい」といいながら、裏では校長を使って「学区は総合される」といいふらし、一部の親を使って、「神戸高校受験の悲願が実現する」と宣伝させている。下地づくりをした上で、有無をいわさず学区の再編成を県教委とぐるになって強行しようという腹だ。

学区再編がもたらすひずみ

意図的に噂が流され、薬をもつかむような気持ちでそれを信じ込もうとしている親がいる。ほんとうに、「競争心が起こり、生徒の間に向上心が沸き上がる」「神戸高校、御影高校への進学の機会が得られる」のであろうか。

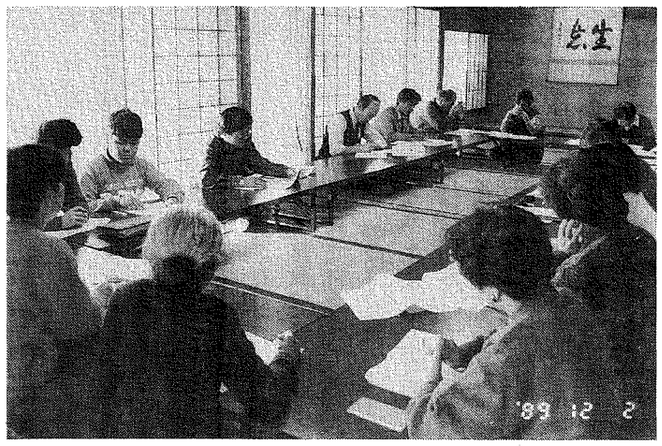
いくつかの気になる点を挙げておくことにする。

一つ目は、「向上心、競争心がない」と市教委が思いこんでいる芦屋の小中学生も、早い時間から例外なく、どうしようもない受験競争の中に巻き込まれており、親が気づかぬまでも多くの子どもがすでに競争に疲れ、挫折し、追い込まれているということである。市教委の意識調査でさえも、生徒が「伸び伸びした学習活動のできる学校」、「受験という限られた価値観で値踏みされない学校」を望んでいることを明らかにしている。生徒は、もはや受験競争をあおることで生気を取り戻すことはないのだ。

「市芦が入試で不合格者を出せば、中学での進路指導がやり易くなり、生徒も勉強をするようになる」と市教委は浅はかにも考えていた。しかし、市芦の定員内不合格は、高校に入学できたらもう一度やり直そうと決意していた生徒の、意欲と希望を奪い取っただけであった。

今、中学校では希望を奪い取られた生徒が、手のつけられないほどに荒れている。

二つ目は、芦屋から神戸高校、御影高校への進学の可能性はほとんどないということである。神戸の中学校では、県芦高校は神戸高校。御影高校に次いで三番目にランクされている。神戸第一学区には上位二校を受験する生徒をのぞいて一三〇〇人の生徒がおり、彼らが芦屋の三中学の生徒九〇〇人と県芦高校入学をめぐって競争することになる。今年の県芦高校への入学者は、神戸から一二八人、芦屋から三二八人であったが、これが学区統合後は、単純計算によると神戸二一激増し、芦屋在住の生徒の入学が激減するということである。神戸の中学校では、県芦高校は神戸高校。御影高校に次いで三番目にランクされている。神戸第一学区には上位二校を受験する生徒をのぞいて一三〇〇人の生徒がおり、彼らが芦屋の三中学の生徒九〇〇人と県芦高校入学をめぐって競争することになる。今年の県芦高校への入学者は、神戸から一二八人、芦屋から三二八人であったが、これが学区統合後は、単純計算によると神戸二一



六九人、芦屋一八六人となる。

従って、学区統合による芦屋からの神戸高校、御影高校への進学の可能性はきわめて少ないうえに、県芦高校への芦屋の三中学からの入学者は三二八人から一八六人へと激減することになる。

四つ目は市芦高校への底辺層の大量流入が起こり、芦屋の中に高校不就学者を大量に生み出すということである。

芦屋市教委は教育改革に失敗したため、学区再編成によって、芦屋の生徒が高校進学の道を閉ざされることになったとしても、神戸から比較的成績の良い生徒を市芦に入学させれば、市芦のレベルアップが見込めると考えている。

しかし、実際には、そうはならない。神戸でも、現在公立の底辺高校は避けられる傾向にあるので、市教委の期待している生徒は市芦にはやってこない。芦屋の公立高校の開門率が高く入学し易いことから、これまでは、むしろ問題を抱えた生徒が、市芦高校の手厚い教育活動を頼って、神戸第一学区から越境入学してきた。定時制・通信制高校の不足から、これまで以上にその傾向は強まってくる。

今年、芦屋では高校不就学者を三〇人生み出しているが、神戸第一学区は、大量二三五人を抱えている。これらの生徒が公立市芦高校を頼って大量流入してくることになり、芦屋に高校不就学者が増加することになる。

そして、中学校の進路指導は、一挙に見通しを失い、混乱することになる。

ばらまかれる幻想

「自分の子どもも神戸高校が受験できる」という声に釣られて、いつのまにか「神戸高校に入学できる」という幻想を持つようになる。こうした幻想に包まれて学区の再編成がなされたとき、芦屋の中に大量の高校不就学者を生み出す結果だけが残ることになる。

親の学歴と所得の高さと、それを背景にした親の徹底した進学指導の結果としてある私立小中学校への生徒の流出は芦屋のどうしようもない地域的特徴である。むしろそうした特徴と。小都市ながらも市立高校を持つという好条件から、高校義務化、高校全入に向かって芦屋は歩を進めてきた。そうした特徴を学区再編成によって根こそぎにするのではなく、むしろ他地区の範として、全面的に進路保障を進め、それを芦屋教育の特徴として積極的に押し出すべきであろう。

子供を見る目が崩れてゆく

精道中学分会　加納健次

スライスされる子供たち

学区のことですが、神戸の場合十数高への単純選抜ですから、どういうことになるかというと、各中学校の進路担当が集まって大根切りどころか、いわばスライス切りの調整をするわけです。ある神戸の先生が名人芸的にするわけです。ある神戸の先生が「合区する手間を考えただけでもゾッとする」といわれているほどの。ですから受験の結果はたしかに不合格は少ない。しかし、すでに希望決定の段階で不本意であるということが大半といっても良いわけです。「ランク」の上の高校ではほとんどの受験者が第一希望ですが、数番目からは第一希望がなくなり、やがて第二希望、第三希望ですら無くなる。ほとんどの入学者がその高校には来たくなかったということが特別ではないのです。

これは北陸のある県の友人の話ですが、その県は全県一区の大学区制で、かれのつとめ

る水産高校はその最低辺に「ランク」されている。全寮制なのですが全県下からくるわけですから。そこには「荒れる」エネルギーすら奪われた無気力な子らが集まってくる。その状態との葛藤が長く続き、授業だの部活だのどころではないということです。エリート校進学の幻想をふりまきながら、そうした序列に芦屋の子らも組み込もう組みこんでいこうといういうわけです。

それから、芦屋では市内の定時制を受けても落とされる、そこで県外の定時制に行くが、通学困難あるいは指導が困難な中で続かない。また私学に行ったが一日でやめてしまうという子もあります。そうした無理な選択を強いられる子を含めると市内で三〇人どころではない。まして、進学率九六・七%がより一層厳しくなると、たとえば尼崎市は九一・六%だということですが、尼崎の場合には厳しい進路状況の中で事業所が多いこともあってそれなりに就職開拓がされてきた面がありますが、芦屋の場合は市芦から切られる子に対しては全く行政が放置してきています。行政の急転で生徒がふりまわされている。その結果まさに地域から放り出され、落伍者の烙印が押されることすらある。家族も含めて追い詰められることもある。

教育現場で崩されていくこと

それから、入試制度の変更という問題は、小中学校の教育の中味を変えていくところに大きな狙いがあると、現場にいると痛感します。これは我々自身の現場の課題だけれど、教師の間違ったプロ根性というか、「原則的にはいかんことだが、当面の対応はとりあえずきちんとしていかないと・・・」というこになってくる。狭い意味で「こどもに不利益をもたらしてはいけない」ことが強調されるようになる。やっぱり希望している高校に行かれへんのはかわいそうや、とその「希望」が選別の思想・ランクづけに基づいているということがあってもそれは棚にあげてすっかりのっかってしまうことがあります。

その結果、たとえば評価の仕方がかわってくる。いわゆる相対評価を厳密にしていかないと進路指導に差し支えるとか、親に順位を知らせるべきだとか、得点分布表をつくろうとかいうことが起こってくる。資料作りのために実力テストを何べんもせんといかんとか、現実的対応を考えたら教科書をきっちり教えないといかんとか。業者による模擬テストが今や全県のかなりの学校で一斉に行われ、校門の外でチラシを配っていた業者が校内で申込を受け付けるようになってきた。そういうことへの職場の抵抗が弱くなっています。そのうち校内でテストするようになるのではないか。それらの実務は実は大変なエネルギーをさく、しかも「受け」の良い仕事なのです。そこに相対的にのめり込めばのめり込む程、我々自身の価値観、こどもを見る目が崩れていく。「緊急避難だ」という逃げ口上があるから、その底流での見方の変化を認めることがなかなかできない。これとの闘い、自分との闘いでもあるこの流れへの抵抗は、どんな派手な行動よりも厳しくしんどいものです。地域、父母の側からもそこを是非とらえて連携して取りくんでほしい。制度を改悪させてはならないのはその通りだが、それだけでは教育運動にはならない。

ところで、学区変更の問題は行政（自治体）や立法機関（地方議会）が決めたわけでも何でもない。単に諮問機関の中間答申が出たというだけのことです。それを市教委が親まで呼んで説明会を持つというのはふざけたバカげたことです。そういう形で親たちの不安をあおって、地域からご丁寧に学校現場に円滑な実施のための準備を催促させる。それをまたぞろ我々が批判は持ちつつ「現実的対応」の立場で間に受けるということがあってはならないと思います。そういう意味では、芦教組もそうですが、全体としてこれに乗せられることなく、そういうやり方自体が不当だというふうに明確にはねつけていくことこそ今問われているように思います。

総合選抜見直し案も

公立高入試改善で調査研「中間報告」

志望校自由に選択

優先率の改善打ち出す

県内の公立高校の入試制度のあり方などを検討していた県教委の内部研究グループ「高校教育問題調査研究会」（会長＝岡田良弘・県教委次長）は九日、中間報告をまとめ、清水良次・教育長に提出した。学校間格差の解消を目的に阪神間などで実施している公立高校入試の総合選抜制度の見直し案を盛り込んでいるのが特徴で、一部の通学区域の分割、併合や、定時制・通信制高校の統廃合と単位制高校の導入を打ち出している。県教委はこの報告をたたき台に現場の教師や親、地域住民らから広く意見を聴き、来春に最終報告をまとめる。

県内の公立高校全日制普通科の入学者選抜制度は、中学区（一学区―一六校）制で、現在は十五学区に分かれている。このうち、受験生の志望する学校ごとに志願者の中から合格者を決定する単独選択をとっている学区は神戸の第一、第二、第三と芦屋など九学区一地区。学区内の総定員の合格者を選択したあと、成績上位者は志願優先で、それ以外は居住地優先で各校に振り分ける総合選抜制をとっている学区は西宮・宝塚、尼崎、伊丹の各学区と明石地区の三学区一地区。中学校近くの地元高校を原則として受験する通携校方式をとっているのは北但、南但の二学区。これらの三つの方式が共存した形になっている。

総合選抜は全体の定員枠に入ればどこかの学校に入学出来る。過度な受験競争が起こらず、様々な能力や関心を持った生徒らが集まり、互いに影響し合える長所がある。しかし、一会」を設け検討してきた。

方では総合選抜や通携校方式については「受験生が希望する高校に行けない」との不満が出ている。

このため、県教委は学区も含めた選抜制度の全面的な見直しに着手、六十三年四月に県教委内に「高校教育問題調査研究

選抜制度の改善案は広く意見を聴くというねらいから一案に絞ることはせず複数案の併記となった。その内容は①現行制度の存続②単独選抜地区はそのままで、総合選抜を見直す③全学区を単独選抜にする④全学区を総合選抜――の四案からなっている。このうち、②の総合選抜一つを挙げている。

中間報告はこのほか、今後、新しく導入すべき入試制度の改善案として、①各学区に指定校（原則一校）を定め、その学校については志望優先一〇〇%とする。指定校以外は居住地優先で合格者を決める（指定校方式）②学区の総定員の合格者のうち成績上位者一〇%までは志望優先（志望優先方式）③学区の総定員の合格者を決めたあと各校の定員の五〇%までの成績上位者は志望校優先（各校志望優先方式）④複数の学校を志願に着手、六十三年四月に県教委内に「高校教育問題調査研究

見直しについて、中間報告は「学校間格差に配慮しつつ志望する学校を自由に選べるようにする方策が必要」とし、志望優先率の改善を打ち出している。

通学区域の分割・合併も

通学区域の改善案では、十校以上が集まって大学区化している神戸第三、西宮・宝塚、姫路・福崎の各学区は二分割、学校数の少ない芦屋、南但両学区で一制・通信制学校については、平成二年度からの生徒数の減少を見込んで、改善案を提示。その内容は①那部の高校はできるだけ存続させるが、阪神間や東播磨、西播磨の各地域では統合②交通の便利な神戸市や阪神間、姫路市内などに学年制を取り払った単位制高校を設ける――となっている。

職業教育では、工業技術や福祉学科など社会のニーズに合った学科の新設のほか、商業科、家庭科を県下どの学区でも受験できるように改めること、推薦枠の拡大などがあげられている。

県教委では中間報告に対する意見を聴くために教育問題懇話会を設置する。中学、高校教師や親らを対象に、各地区でこの報告の説明会を開き、現場からの声も聴いていきたいとしている。

「朝日新聞」1989年8月10日付

「教育改革」の失敗と学区再編の幻想

市芦分会　大角進一

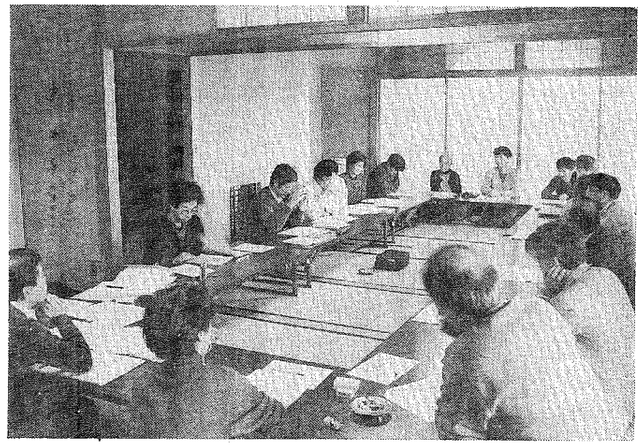
破綻した選択カリキュラム

「教育改革」のいい例が市芦の場合です。三年前、一人一人の個性に応じた進路を保障しますということで、いっぺんに一一名の教師（二五％）を削減し、市芦を支えてきた勤続一〇年以上の教師九名を教師でない職に強制配転しました。

ねらいは勉強のできない子、手のかかる生徒を切り捨てて、大学進学を目ざした選抜カリキュラムを導入することでした。入試で六二年度三三名、六三年度二五名もの生徒が定員内で切り捨てられました。

その結果がどうなったかといいますと、三年前、「教育改革」が本格化する前の一九八六年度卒業生の進学状況は、卒業生一二三名中、大学進学二七名、短大六名で、「教育改革」の矛盾を一番受けた昨年の卒業生一〇一名中、大学進学六名（一名はII部）、短大二名。そして「新生市芦」の一期生といわれた今年三年生の在籍者八二名中、大学進学一名、短大一名（十二月二日現在）です。

この事実は何よりも「教育改革」が失敗であることを物語っています。市芦が良くなる気配はまったくありません。現二年生の在籍数は九五名で、そのうち五名ほどが長期欠席です。三年生に進級できる生徒は九〇名を確実に割ることになります。



「教育改革」推進派から期待されている若手の先生が、「今の子は一言でいって、無気力です。三分の一の子はまるで勉強する気がない。授業中やいうても廊下を走りまわったり、平気で教室を出ていく。学校へ来てない生徒も何人かいる。彼らは学校に対する執着心がない」と言っています。

生徒の実態を無視した選択カリキュラムの矛盾がすべてに現われています。進学のためのカリキュラムなんですが、二年生の時点で三割が進学コース、七割が就職コースに近い選択をするのです。そのため英語などは少人数の授業になるのですが、「裏番組」にあたる授業は、生徒の人数や教員数からいって、まるで成立しなくなるのです。生徒にとっては、自分のクラスが解体され、教師は一人で四科目も五科目も受けもたされ（他の県立高校では一科目か二科目）、教材研究や授業研究が十分できず、心ならずもまにあわせの授業になっていくのです。

そのうえ、職員会議が一度も開かれませんから、そういった基本的問題すらオープンに話し合われることがないのです。すべてが管理職を中心に密室で決められるのです。

生徒処分の乱発

先日、いろんな問題が重なりある生徒が無期停学になり、指導もはっきりしないまま、ズルズルと引き延ばされ、出席日数が不足して、休学に追い込まれたという話がありましたが、先ほどいいましたように職員会議が開かれませんので、どういうことが問題となり、どういう指導が行なわれているのかということがよくわからない。朝の五分間の職員朝礼で結果だけが報告されるのですが、聞きのがしたらそれまでです。かってのように、生徒指導をめぐって教師全体で論議を深める場すら奪われているのです。そのぶん生徒は次々に処分―中退においこめられています。

つい最近も、一ケ月の停学処分が行なわれたのですが、それは留年を確定していくようなもので、長すぎるという意見も出された様ですが、その生徒の「悪い面」のみがとりざたされ、処分が決まっていくのです。今の市芦では、生徒の処分を行う特別指導委員会ばかりが忙がしいのです。どのように立ち直らせていく指導をするかは二の次、三の次となっているといってよいのです。

学区制の問題は、こういったデタラメな「教育改革」をおおいかくすには最も好都合なものと思います。「良い高校に行ける」「市芦のレベルが上る」と、また「教育改革」が始められた時と同じやり方で進められているような気がします。公平委審理に勝利して、市芦に教師生命をかけた九名の先生を取りもどす以外に市芦を良くする道はないと思うのです。

障害児の能力別再編も符号する

麦の家　永岡隆仁

教育のくみかえがどの分野でもやられている。障害児教育の再編のやられ方と、今回の校区変更や定通つぶしは基本的にはセットだ。

いうことをおとなしくきく子供を再編し、定時制通信制には金をかけずにつぶす、そこからもこぼれる障害児については、後期中等教育で重度の子を切る。その顕著なものが、「障害児の後期中等教育のあり方についての意見書」で、その主旨は、養護学校については、三原則、つまり①自力通学、②身辺自立、③授業にすわるというのがあったが、それが養護学校高等部にいき場のない子がふえ、重い子も軽い子もきてる、教育効果が上がらんとして整理しようという。

その方法は、軽い方は職業訓練中心、中位の子は生活訓練を、重度は身辺自立訓練と、三つの程度別に、つまり障害児の能力別編成をし、障害の程度に応じた教育内容にする方が効果が上がるとした。しかし問題は、むしろ重度の子については、どうせ養護学校を出ても次の進路の見通しがないし、作業所にいく子が七〇％の中で、重い子は養護学校だけが進路でなく、作業所や施設に進路を求める方が良いとした。その例が、今年に養護学校の分校が尼崎でスタートしてる。阪神養護学校の中のチエおくれの子の分校としてる。それは確かに親の側の要求でもあるが、ではスタートした分、枠がふえるのかというと、いまは山手中学の教頭になってる山本氏などは、人数はふえないという。職業訓練に適応できる子を中心にとって効果を上げるとして、軽い子を中心としている。そして、昨年からは養護学校の入試選抜要綱もでき、ふるいわけをしている。

市によってちがうが、中等部からきた子を優先して入学させ、他を地域からとるという場合、小、中等部から入れるということに拍車がかかっていくことになる。ようするに、

能力別に分け軽い子を中心にすると、重い子はいき場所がなくなる。作業所についても、都市部は満杯で、西宮でもあと一～二年で満杯となる。空いてるのは僻地、山間部のみで、いき場もなく在宅になるしかないんです。けっきょく、重度の子に在宅を強いていく方向なんです。父母の要求－義務教育後の進路の保障ということにかみ合うように見えて、じつはかけはなれていくんです。

市芦という全日制普通高校の中に障害児が入ってきていたという事実は、「整合性」がないものとして、養護学校の職業訓練にあてるべき子だということなのです。市芦のこの間のやられ方は、全日制の学区変更、定通制の統廃合、養護学校の能力別再編等の流れに即した「教育改革」だ。

障害児の進路として定時制の門をたたくとりくみがあるが、一方で在宅になっても支えきるという周囲のとりくみがない限り闘えない。そんな中で我々も闘って入ってきた。

近況

非論理的世界――強配に腹が立つ

一九八七年上宮川文化センターに強配　石橋幹夫

上宮川文化センターに強制配転された二年と八ケ月が経った。この時間の経過は今現在でも長く感じもし、短くも感じている。

しかし、この二年と八ヶ月間に今回の強配に関する教育委員会側のまともな（一応行政的にであって、本当の強配理由は口が裂けても言えないだろうが）理由を聞かされたことがない。

当初、公平委員会審理の場では少なくともその程度の理由は聞けるものと思っていたが全くの期待はずれであった。これまで処分者側から強配した理由らしきものは前田元校長からの証言でしか聞かされていないが、このようないい加減な理由で強配されたと思うと腹立たしい限りである。

彼の証言によれば第九回公平委員会審理の処分者側の主尋問で寺内弁護士に尋ねられて「本校の経験は一一年だったと思います」「中堅です」「理科の中で専門は物理でありますから数学を教えることができるから」強配したということとらしい。

第一点目の「中堅」ということであるが、この言葉に対しては「若手」という言葉が対応すると考えられる。だからある集団に対して「中堅」という部分があるならば、その集団の残った部分は「若手」ということになるはずである。

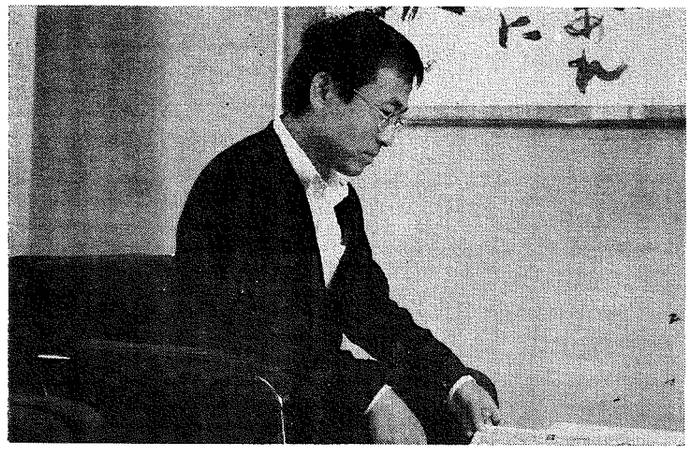
つまりその元になる集団、この場合でいうならば八七年市芦の理科教員集団を二分したと考え、その基準となった尺度は市芦での教員経験年数、あるいは教員経験年数であると考えるのが妥当である。

この前田元校長の強配した理由に関する証言は大きく二つに分けられると思う。一つは「中堅であるから」強配をした。もう一つは「数学を教えることができるから」強配したということとらしい。

山手中学を切られたゴンタな子や、市芦を切られたゴンタな子らが、定時制高校に入学して、お互いにつながって、まっとうに生きている姿があるし、市教委は勿論のこととして、現場の先生らが、短期的な問題だけでなくて、そんな子供らをどうするのかを考えていく場をどうつくっていくのかという問題がある。

その時市芦での教員経験年数でいうならば私よりながい人は二人いた。また教員経験年数というと四人いた。だから同じ「中堅」教員の集団は少なくとも三名はいたことになる。だから「中堅」が強配理由になるならば私以外少なくとも二名もその対象になるはずである。

第二点目に数学を教えることが出来ることを強配の条件のようにいっている。私の場合



その理由付けとして、数学の教員免許状を持っていないがために「物理が専門でだから数学も教えることが可能である」という非常に苦しい言い訳がなされた。

物理が専門という根拠もよく分からないし、さらに物理が専門なら数学も教えることが可能であるということ自体がむちゃくちゃな話である。理科の教員よりも数学科の教員の方が数学を教えることはより「可能」であることはいうまでもない。

この点を第二〇回公平委員会審理の申立人側の在間弁護士の反対尋問で突かれると、「採用する時には数学も担当してもらうつもりであった」と証言をした。しかし、このい方には大きなごまかしがある。「数学も担当」ということは採用される前の採用者側の予定にしかすぎず、実際に理科の教員として配属され一度も数学の授業を持たなかったことからもその理由にならないことは明らかなことである。

以上私が強配された理由は他の教員にも当てはまることで、特定される条件にはならない。

さらに以上述べたような理由にもならない理由で、数学を教えることが可能であり、数学を教えなさいというならば、その事に関しては私は第一点目の「中堅」などというものではなく、「若手」以外の何者でもない。だから「中堅」と「数学を教える」ということは両者絶対に並び立たない二律背反事象で論理的にあり得ないことである。

要するに結論が先にあってそれにあわせて強配の理由が作られたということである。だから当然無理が出てきて、その帳尻すらあわせきれなかった。その結果がこれである。

他の強配された人の理由も同じ様に矛盾したものであるのは勿論のことである。

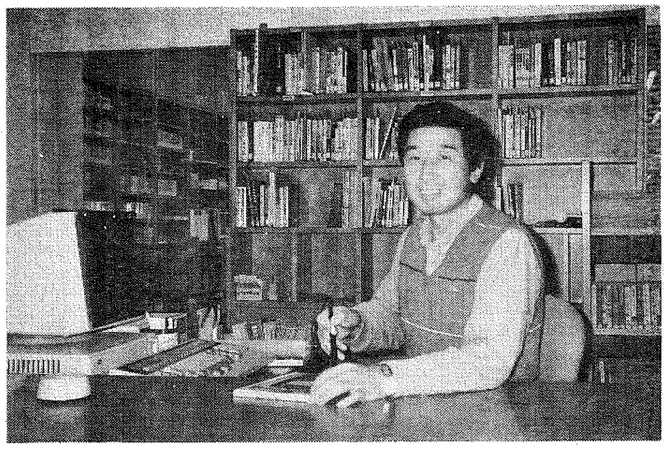
本当にこんな非論理的世界が許される強配に腹が立つ。

芦屋の糞尿譚

一九八七年図書館に強制配転　森村啓一

今年から、ほんのたまにではあるけれど、自動車文庫に乗って、市内を巡回するようになった。

図書館のカウンターに座って、コンピューターを操作するという味気ない毎日を送っていると、人間性・感性といったものがだんだ



んと遠のいていく感じがして、非常に人間味あふれる人が恋しくなってくる。

運転手のKさんと二人で仕事をするこの自動車文庫の巡回は、何かホッと一息つける私にとってのささやかないこの時なのである。初老のKさんは小さい頃の話をよくしてくれるが、何気ない昔話の中に、当時の芦屋の部落の生活とそこに生きる人々が生き生きと映し出されることにびっくりさせられる。

今日はその中からひとつ紹介しょう。芦屋の部落の中でおこった労働争議の話である。

今から三十年ぐらい前のことであったという。当時、芦屋の屎尿処理はバキュームカーを所有する親方が数人の労働者を雇って経営する零細な個人商店によって行われていた。このような親方が何人かいて、芦屋中の屎尿をくみとっていたのだが、労働者の待遇はどこも似たりよったりで、かなりひどかったらしい。

あるとき、その労働者たちが一斉に待遇改善を要求して、ストライキに立ちあがった。芦屋中のバキュームカーを有馬の山奥に隠して、団結小屋にたてこもった。その団結小屋からほんの目と鼻の先にあった見張り場に陣どった親方たちも手が出せなかった。そんなにらみあいが一ヶ月近く続いた。とうとうしびれを切らした親方たちは他市の親戚まで動員して、早朝団結小屋を襲撃した。にげまどう労働者たちにコン棒を手にもった親方たちが襲いかかる。親方側の襲撃が一段落すると今度は労働者側が反撃に出た。芦屋の部落の露路のいたるところにそんな光景がみられたという。流血騒ぎは昼前に終わり、部落内にはまた静けさが戻ったが、事態は一向に解決しなかったという。（実はKさんはこの日、朝寝して昼前に眼がさめたら、こんな大騒動があってんぞと聞かされ、目撃できなかったことをとても悔やんでいる）。

一方、あふれた屎尿にたまりかねた各家庭から市役所に苦情が殺到した。そこで市役所が両者の中に入って調停せざるをえなくなった。それは屎尿処理業務を市が行うというもので、親方側も労働者側も市の職員として雇用することで解決をみたという。

芦屋の労働運動史上、正しく位置付けられるべきこの争議のことはあまり知られていない。水洗化率百%の「国際文化住宅都市」というノッペリした表情をもつ芦屋市はこのような労働争議があったことを忘れさせようとしている。

市芦分会字報だより

試験期間中の自宅研修は時期尚早、休憩室は印刷室を

市芦分会

市教委に「前向きに検討する」として持ち越しになっていた試験期間中の自宅研修についての早期解決を再三にわたって催促してきたが、十二月十一日、溝田課長からの回答で

またもや私たちの期待は裏切られた。

「校長に電話をして組合との話は伝えたが、いろいろ問題があるということなので、直接合って話をする予定だ」ということは聞いていた。その後、校長の話を聞いて市教委が判断したとして、「現在の状況で自宅研修を認めることは時期尚早である」との回答があった。

他の県立高校で自宅研修を認めている学校は希である、職員会議も開けず管理職と職員の間の信頼関係がない、開校記念日の研修願いについて職員が大勢で文句をいった、などがその理由としてあげられている。いったい校長はどんな話を市教委にしてきたのか、こういう事柄こそが、管理職に対する不信感を増幅させてきたのではないか。

服従を迫る市教委回答

多くの県立高校では試験期間中の自宅採点、自宅研修が行われており、市立高校ではほとんどの学校で自宅研修が認められている。

職員会議も開かず、職員にだけしんどい目をさせておいて、管理職はろくに仕事もせず、勤務時間がすぎれば職員を残してさっさと帰宅する。どうやってこの管理職に信頼を寄せよというのだろうか。信頼関係をぶちこわしてきたのは、すべて管理職の職員への対応ではなかったか。

開校記念日の研修願いは、「研修をご許可くださいますようお願い申し上げます」と、われわれに奴隷の言葉を要求し、それに異義を唱えたことを理由に自宅研修を認めないとする校長の態度は、支配者のそれである。まいた他方で、五千円、一万円の小遣い銭をバラまいて教員をてなづけようとする姑息さは、限りなくわれわれを馬鹿にしている。

こうした校長と市教委の対応は、餌をぶらさげて私たちに服従か、闘いかを迫るものである。私たちは、この三年間どのような弾圧にも耐えてきた。自由は闘いとられてはじめて自由であり、私たちは、校長や市教委の陽動作戦には乗らず、最後まで市芦分会に結集し、毅然とした態度で自由の拡大めざして闘います。

責任重大です

市芦救援会事務局

前々号でお知らせしておりましたが、十一年続いた「せいうん通信」終刊号が発刊されました。長い間御苦労様でした。

その結果、「市芦救援会通信」が「市芦反弾圧闘争を支援する会」会員の方々にも会の機関紙として送られてゆきます。

これまで私たちは市芦を中心にした市内の闘いを伝えるという編集方針でのぞんできました。より濃密で臨場感にあふれる紙面を、という考えで、それなりに意味があったと思っています。

ただ、それ以外のことについての紹介は「せいうん通信」にまかせてきました。

「支援する会」の機関紙でもあった「せいうん通信」は、市芦反弾圧闘争と各地の闘いを結びつけながら紹介してゆくという編集方針がとられていました。青雲闘争・畝本不当処分撤回闘争が全国的規模の広がりを持って繰り広げられたという遺産を持っていたからです。

これからはおんぶにだっこの状態は期待できません。一人でこれらの課題をになって編集してゆかねばなりません。

これまで以上のみなさんの参加をお願いいたします。

第五回芦屋教育井戸端会議の御案内

一九九〇年一月二七日〈土〉PM2～4半／芦屋市民センター三〇三号室

ぼくは、学校の機能というのは、実は知識とか技能とかを蓄え、身につけるというのはウソやないかと思う。どうせ学校出たら忘れんのやからね。ところが、いっぺんそこを通ることによって心がどれだけ耕されるかが学校の役割とちゃうか。

森　毅

前回は、兵庫県高校問題中間報告をもとに再編が企てられている学区制問題・定時制通信制統廃合問題を中心に話を聞きました。

辻さんから現在の定時制高校へ通っている子どもらのようすと、企てられている定時制通信制統廃合が子どもらへ与える打撃について現場の直接の声が聞けました。定時制を「低児生」と揶揄し、「全日制のオマケ」と侮辱し、「荒れる定時制」と敵視する空気の中で、変わらず働き学ぶことを求める子どもらと教師の姿を話されました。

芦屋市においても市内唯一の定時制高校である武庫高校の存続の署名と市議会請願運動が取り組まれましたが、それもまた新たな段階を迎えようとしているところです。

「心が耕されるところ」としての学校が、また一つ潰されようとしています。地域の定時制高校の存続を願う私達のよりどころは、「松本教育改革」との対決とひとつながりです。

学区制問題については深沢さん、加納さんから話がありました。深沢さんからは、市芦教育改革を下敷にしながら、県教委・市教委には高校に行けない子らのことなど眼中になく、ただ「高校全入思想と運動」の破壊を狙いとするものであるとの批判が出されました。

加納さんからは、学区制変更が小中学校教育の中味の変更をもたらすものとしての危機感がもらされました。なによりも子どもを見る目がくずれていく、と。「当面の対応として……」という口上ですりぬけることを許さぬ地味な教育運動の必要が説かれました。

「長年の親の悲願の実現－神戸第一学区への進学の実現」をキャッチフレーズとする陰険な動きが加速する中で、立ちどまって子どもの心と体の悲鳴に耳を傾けたいものです。

次回は前回の話をタタキ台として、引き続き「高校問題中間報告－学区制変更、定通統廃合、入試選抜制度」をテーマとします。

バタバタと忙がしい時こそ井戸端らしくやりたいものです。窓にチラつく雪を見て、少しお茶（？）でも飲みながら……。

訂正とおわび

前号通信一三ページ、精小分会の守本先生のお名前を誤まって印刷しました。ここに訂正し謹しんでおわび申し上げます。

活動日誌〈抜粋〉

十一・二十　事務局会議
二十一～三十　一時金・諸要求の対市交渉
二十三　伊丹朝鮮人差別を許さぬ会集会に参加。
二十五　分会会議
三十　分会会議
十二・一　分会会議
二　第四回教育井戸端会議。
六　通信№三五配送。
七　関西争議交流会例会に参加。
九　分会会議（組織問題）
十　兵庫県韓国青年民族文化発表会に参加。
十二　全員投票により分会の日教組残留決定。
十三　地労協常任幹事会に参加。
十四　ゴンチャロフ労組不当解雇地労委傍聴参加。事務局会議。
十五　共同購入実施。